

## 脱原発世界会議2012@YOKOHAMA セッション報告書

- 企画タイトル B-5「原発のない東アジアをめざして」
- 日時 2012年1月15日(日) 14:30~16:15
- 場所 3Fホール(301+302)
- 企画参加人数 約400名
- 企画団体 東アジア環境情報発信所
- 文責 廣瀬稔也(東アジア環境情報発信所)
- 登壇者
  - 崔 冽(チェ・ヨル) 環境財団 代表(韓国)
  - 李 憲錫(イ・ホンソク) エネルギー正義行動 代表(韓国)
  - 付 濤(フー・タオ) 中国発展簡報 編集長(中国)
  - 程 淑玲(チェン・シュリン) ブルー大連 代表(中国)
  - セレンゲ・ラグヴァジャヴ モンゴル緑の党 元党首(モンゴル)
  - 平田仁子 気候ネットワーク 東京事務所長(日本)
  - 山崎求博 東アジア環境情報発信所 理事(日本)

セッション「原発のない東アジアをめざして」では、日中韓にモンゴルを加えた東アジア4カ国から6名のスピーカー論者が各国の状況を報告し、国境を越えた連帯の可能性を探った。

まず、韓国環境運動の黎明期から運動を支えてきた環境財団の崔冽(チェ・ヨル)氏が基調提起をおこなった。国境のない海を往来する、3.11以降の目に見えない脅威に対しては日韓をはじめとした国境のない共同が必要である、という訴えが会議の口火を切った。

次に中国発展簡報の付濤氏から中国のエネルギー事情について様々なデータが示された。中国では原子力と自然再生エネルギーの両方が大幅に推進されるという、この会議の主旨から見ると両義的な状況が生じているという。

韓国エネルギー正義行動の李憲錫(イ・ホンソク)氏は、3.11以降むしろ加速している韓国の原子力推進政策を報告し、警鐘を鳴らした。

また元モンゴル緑の党党首のセレンゲ・ラグヴァジャヴ氏から、国内の核廃棄物貯蔵施設やウラン鉱山の開発をめぐる、日本を含む原子力推進国およびモンゴル政府とモンゴル市民の間の最近の緊張について貴重な報告があった。

4名の報告を受けた総合討論の冒頭、中国ブルー大連の程淑玲氏は、原発問題に関する正しい知識を中国の市民に広げていく必要性と、政府との距離感のとり方の難しさを指摘した。最後に日本の気候ネットワーク平田仁子氏は、原発に反対する論理を簡潔に整理したうえで、会場の空気を政治の現場に伝えていくことの必要性を主張した。

セッションの最後に、崔冽(チェ・ヨル)氏が提起した、東アジア脱原発・自然エネルギー311人宣言の日本側の動きが、吉岡脱原発世界会議実行委員長より報告された。

このセッションを企画するにあたり、東アジア各国の原発をめぐる諸課題を共有し、「原発のない東アジア」を実現したい人びとの新たなつながりづくりと具体的なアクションプランを策定することをめざしていた。

セッションを通じて、脱原発をめざして4カ国の市民の連帯を強めていくことと、原子力や自然エネルギーなどをテーマとした東アジアの若者が集うワークキャンプの実施、原子力発電所と福島第一原発事故の実態を正しく伝えるための多言語の資料づくりを進めていくことが合意され、当初の目的を達成できたと考えている。



(写真:佐藤秀明)